



## 保育の中の物語(4)

# 新しい世界の扉を開く

～ 入園三日目の姿から ～

岸井慶子

入園三日目。子どもだけでなく、親や保育者にもたくさんの思いがあふれるときだ。自分の手を握って離そうとしないわが子への、母としての複雑な思い。無条件に自分を信頼し離そうとしないわが子に、愛おしさや置いて帰らねばならない不憫さが込み上げてくる。と同時に、ほかの子どもが母親と離れ友達とかわる姿を間近に見れば、「なぜ？ 私の育て方が悪かった？」という焦りにも似た気持ち心がよぎる。一方、親が決めた入園で（自分が決めたわけではない）、一人知らない所に置いていかれる子どもの不安はいかばかりだろう。三歳児の日子は母と手をつなぎ、泣いて登園してきた。手には大きなハンカチを握りしめている。やがて日子は、母の手を握ったまま動き出す。テラスで



年長組が世話をしているザリガニが小さなバケツに入っている。しゃがみ込んでザリガニをつかもうとして、思わず母の手を離す。母も日子の脇にしゃがみ一緒に見る。

この時期、ウサギや金魚やザリガニなどの果たす役割は大きい。みんな子どもの体よりも小さく、予想外に動き、命を感じさせる。しかも、ゲージや水槽やバケツに入っているその生き物は、決して自分には向かってこない。

教頭のO先生が仲間に加わり、しゃがんで一緒にザリガニを眺めたり触ったりする。母が立ち上がる。O先生は母に「もう大丈夫。帰ってもいいですよ」と合図する。母は急いでその場から離れる。しかし、母が自分から離れたことに気づいた日子は驚天動地、飛び上がるようにして母の下に駆けだし激しく泣く。「なぜ？ お母さんと一緒にいたいの、私をだますようにして私を置いて家に帰ろうとするなんて」と言いたげ。今までこんなことは一度もなかったに違いない。親子の別れはもう一度やり直しとなり、母はしばらくしてから家に帰った。

気づかないうちに置いていかれた日子は、泣きながら園庭へ母を探しに歩く。ハンカチで時折涙をぬぐいながら探し歩く。O先生は日子の後ろからつかず離れずの距離でついて歩く。



○先生はH子が母を探したい気持ちを受け止め、では一緒に探しに行こうと誘い、一緒に探しながらも、H子が園庭から外に出て行こうとするとやんわり止める。H子の気持ちを受け入れながらも、全面的に許すわけでもない。そこには微妙な気持ちのやりとりや駆け引きがある。許すか許さないか、YESかNOかではなく、その間でやりとりすること、付き合うこと、程よい距離をとることがとても重要だ。大人と子どもの関係の中で忘れられているように思う。

庭の端にある滑り台までやってくると、○先生は「H子ちゃん、先生、トイレに行ってくるからここで待っていてくれる？ここにつかまって」と滑り台の手すりを示す。○先生の「一緒に行く？」の誘いを断り、H子は手すりとお守り代りのハンカチを握りしめながら一人で待つことにする。○先生が立ち去ると、両足をせいっぱい「つま先立ち」にして、伸びあがって○先生の去った方を見ている。

けなげではないか。このけなげな一生懸命さを私たちはどのくらいわかっているだろう。保育者は自分がかかわろうとするときやかかわっているときの子ども様子はよく見るが、自分がかかわった後や立ち去った後、その子がどんな思いで保育者を見つめているのか、そのことになかなか思いを至らせない。子どもが恋い焦がれて保育者を見つめる視線を忘れないようにしたいと思う。



すぐに戻ったO先生は「トイレがいっぱいだったの。これを持って、待っていてくれる？」とさも大切そうに抱えたボールをH子に渡し「また行ってくるね」と再びその場を離れた。今度は真新しいピカピカの黄色いボールを抱えて、H子はO先生を待つことになった。

「お待たせ。待っていてくれたのね。」と言いながら戻ったO先生は、ボールに向かって両手を伸ばす。H子の手からボールが落ちる、転がる。H子が追いかける、ける。O先生からH子にボールがけり返される。いつの間にか、近くにいた他児が仲間に入る。あの大きなハンカチはまだ片手に握られているが、他児とボールを追って走るH子の表情も体も確実にほぐれてきている。

ボールは、思いがけない方向に転がるので反射的に追いかけたくなる「動きを引き出す力」をもっている。これが人形だったらまた違った展開を見せただろう。子どもが新しい世界の扉を開く鍵はいろいろだ。小動物かもしれない、玩具かもしれない。もちろん保育者や他の幼児などの場合もあるだろう。何がその子にとっての鍵になるのかわからないが、一緒にゆっくり探したいと思う。同時に、鍵となる物の「質」と「意味」について考えたいと思った。これは、保育者が経験的に理解していることなのだが、もう少し整理してみたいと思う。

(鎌倉女子大学短期大学部)